

特集：大学の設置

## 四大の誕生 ——英和の新たな軌跡——

教授 土 持 法 一

平成元年（1989年）、英和の長年の夢であった四大が誕生し、幼稚園から大学までの一貫教育が完成して新しい時代を迎えることになった。時代も「昭和」から「平成」へと移り変わった。

『史料室だより』編集部により、四大誕生についての企画がなされた。四大設置に関わった筆者がこれをまとめることになったが、原稿の締切期限がきているいまでもまったく筆が進まずに「躊躇」している。それは、四大が誕生したといっても、まだスタートしたばかりで、母親のお腹にいる「胎児」のようなものなので、何をどのようにまとめたらよいのかわからず途方にくれているからである。四大の設立に関しては不定期ではあったが、当時の『準備室だより』や学院報の『楓園』そして『短大だより』などでその進捗状況および四大の特徴などについてすでに述べているので読者には記憶にあることと思う。ここでは、編集部の意向もあり、上記の機関紙に掲載されなかった四大誕生に至る「舞台裏」の出来事をあくまでも「個人的」な観点から追想することにする。

四大の構想がどのようにして生まれたのか知らないが、昭和61年7月に設置された当初の大学設置準備室は六本木の法人本部の二階の狭い部屋で、ワープロと電話があるだけで、専任のスタッフも2名であり、四大を新設するにはあまりにも「乏しい」限りであった。開設予定を1年早めたために、どのような大学をつくるのか、またその構想および理念さえもはっきりしない「暗中模索」

のスタートであった。いまふり返れば信じられないことであるが、まったくどこから手をつけていいのか皆目見当がつかないという状況であった。

新たな四大を横浜市に設置するということから、まず、首都圏および当時学院高等部在学の2年生を対象に進学意識調査を実施し、将来的にどのような大学の設置が可能であるか調査する必要があった。これは高校生がどのようなことを将来大学で学ぼうとしているのかということを知る以上に「文部省対策」であった。すなわち、文部省では18歳人口の減少期に対応して、すでに大学の新設および学部を増設をきびしく制限していた。とくに、横浜市のような首都圏では大学の数は充足しているとして、もうこれ以上に大学を増やす計画はなく、認可されるのはよほど特色のあるものかあるいは社会および地域のニーズに応じたものでなければならないというきびしい状況にあった。当初は、別な学部および学科名称も検討されていたが、このアンケート調査によって高校生の進学動向を把握し、さらに学院の方針に照らして、学部および学科を決定した。さらにその調査データにもとづいて文部省を「説得」することから、四大設置の準備がはじまった。英和の横浜校地の近隣に同じような学部・学科が既設されている場合には大学の設置等はいっさい認められないのは当然のことであるが、たとえば、近隣に経営上うまくいっていない大学がある場合でも、学生確保などで競争することを理由に、大学の認可を得ること

は困難である。要するに新たな大学を設置するには予測もつかない多くの制約があったのである。幸いに、英和の四大の人文学部（人間科学科・社会科学科）は女子大学としては首都圏はもちろん全国にも前例のないユニークなもので、早くから教育関係者に注目された大学であった。

つぎに、横浜市に新設を予定していた英和では、当然神奈川県および横浜市の協力が不可欠であった。神奈川県はもちろんのこと、横浜市は英和の「横浜進出」をもっとも歓迎し、その窓口である市の教育課は財政的な援助はできないものの、それ以外のすべての面で協力的で、陳情のために、文部省に何度か足を運んでもらった。横浜市長を表敬訪問し、大学設置の協力を要請した折、市長は横浜市にはすばらしい高校はたくさんあるが、その卒業生のほとんどは東京に流れる、いわゆる「頭脳流出」であると嘆かれ、英和の大学ができることで、少しでもこれを緩和でき、多くの女性が横浜市にとどまって高等教育を受けてくれることを願っていると話された。市長は結婚式の披露宴などに出席した折、新婦の出身地が横浜市でも、最終学歴が東京の〇〇大学と紹介されるのがとてもさびしいとの談話もされた。確かに、横浜市は神戸市と良く比較される都市であるが、その大きな違いは神戸市には有名な女子大学が多く、そのほとんどが大学院をもつという教育の「先進都市」であることが指摘されている。横浜市の女性が神戸市に比べて「劣って」いるのではなく、統計上ではまったく逆な状況で「優れて」いるのである。横浜市に新たな四大を設置するときの説得ある理由として、その「裏づけ」データとして私たちが利用したのは、横浜市には高学齢の女性が日本で最も多く在住しているという全国調査のデータであった。そのような高学歴者を母親にもつ横浜市では女子の高等教育がますます重要になってくるという「仮説」を立てて、四大の必要性をアピ

ールした。

これからの大学は地域社会に根ざしたものでなければいけないとの観点から、横浜市の協力はきわめて大きいものであった。

さらに、特色ある大学づくりということで、開学後における海外の姉妹校との交換留学も当然考えなければならないものの一つであった。英和には長い伝統はあってもまだ四大はなかった。海外の大学と対等な交換留学の提携を事前に結ぶことは容易ではなかった。交渉した大学からはスタートした後に検討するといわれるのが普通であった。しかし、大学を宣伝する上で、そのパンフレットに海外との交換留学や語学研修をもちこむことは、国際的な大学をイメージづける上でどうしても必要であった。そのようなときに、横浜市を「保証人」に留学先の大学を探そうと考えた。周知のように、横浜市はカナダのバンクーバー市ならびにアメリカのカリフォルニア州のサンディエゴ市と姉妹都市の提携をしているので、横浜市の「媒酌」でサンディエゴ州立大学と「結婚」して、協定校を結んだ。幸い、サンディエゴ州立大学との交換留学協定を熱心に推進してくれた教授夫人は日本人で、英和のことを良く理解してくれ、「日本のウェルズリー・カレッジ」と英和をサンディエゴ州立大学関係者に紹介してくれた。サンディエゴ州立大学は青山学院大学そして横浜国立大学の協定校でもあり、新設校の英和が開設時からそのような協定校の提携が結べたのも横浜市の協力があったからである。すでにサンディエゴ州立大学からの留学生も来ている。今秋には大学から二人の学生が留学することになっている。そのうちの一人は日本国際教育協会から奨学金として滞在費および往復の交通費が支給されるという幸運なスタートを切っている。また、カナダに関しては姉妹校は現在決まっていないが、カナダ大使館の全面的な協力を得ている。四大の開学式典に参列した方は記

憶に新しいと思うが、開学を記念して、カナダ大使館より「かえで」が寄贈され、四大の正面玄関横に植樹された。このかえでは英和の「校章」を形どるもので、英和の歴史の象徴でもある。またこの「かえで」は昭和天皇に献上されたものと同じ「由緒」あるもので、これからもこのかえでとともに、英和におけるカナダ研究の促進が期待されている。今年度はカナダ政府からのカナダ講座充実助成金も支給される予定である。

さて、最近の全国高校生の意識調査からも明らかのように、高校生が大学を受験する時の選択の基準で最も重要なファクターになるのは「教育内容」が第一位であることがわかった。偏差値主義に「汚染」されているといわれながらも、偏差値による選択が二位で、多くの高校生が大学での教育内容を進学最大の選択理由と考えていることは、日本の高校生の「健在」を象徴するもので喜ばしいことである。英和の四大でも教育内容すなわちカリキュラムをどのようにするのか、新たな21世紀を視野に入れ、国際的に通用するような教育内容を目指したのである。文部省に新設を予定している大学の教育内容を説明するときに、既設の大学ですでに開講されているようなものでは、「新鮮味」がなく、その結果説得力を欠くことになるのである。英和の四大のカリキュラムにはアメリカ東部の名門女子大学を参考にする必要があると考え、マサチューセッツ州のスミス・カレッジ、ウェルズリー・カレッジそれにニューヨーク市のコロンビア大学バーナード・カレッジなどの女子大学を文部省海外学術調査で渡米の折に訪問し、関係者にインタビューし、とくにそのカリキュラム内容を調査した。なかでも、女性学、フレッシュマン・セミナーなどリベラル・アーツ系のカリキュラムを、英和のカリキュラムを編成する際の参考にした。

そのような経緯も功を奏して、文部省でもその

ような特色ある大学ならばと「前向き」に設置申請を検討しはじめたのである。しかし、文部省では教育内容について、最終的には大学設置審に諮問することになるので、その際、申請大学の教育内容について文部省が説明しなければならない立場になる。そうなるとうままでのように「進歩的」な立場ではなく、伝統的な「保守的」な立場から、カリキュラム内容をきびしく検討することになり、申請した教育内容が「前例」のあるものかどうか認可の重要な「基準」となるのである。すなわち、せっかくのユニークな教育内容も、前例がなければ、結局は修正しなおさなければならないというジレンマに立たされることになるのである。そのような葛藤の中でも、「フレッシュマン・セミナー」「フレッシュマン・ソフモア英語」などユニークなものをいくつか残すことができたのはラッキーであったといわねばならない。新しい教育内容を導入するには時間と労力を要するもので、その成果が現れるのは卒業生が社会に出て活躍する21世紀になってからのことであろう。

試行錯誤の末に、学部・学科および教育内容を中心とする第一次審査をパスすることができた。

大学の開設および学部の増設等は2年審査であるが、第一次の審査は「曲がり」なりにも通過することができた。最近の大学新・増設ブームを見ていると、第二次審査が「難関」のようである。第二次審査とは「教員審査」のことで、とくに第三セクター方式で地方に大学の新・増設を求める学校法人にとっては、実に「頭痛の種」である。教員審査の資格審査にパスする専任教授の数を開設2年前に全部そろえることは至難の技である。地方の新設の大学では教授を確保するために、温泉付の別荘を提供するという「苦肉の策」を講じるところさえあるとも聞く。その点で英和は恵まれていた。首都圏で、伝統ある女子校ということで「人気」があった。それ以上に、学長の「人脈」

によって「立派」な専任および非常勤の先生方を確保することができた。専任教授一覧を見た文部省の担当官は学部よりも、大学院の設置にふさわしいと評価し、むしろ18歳の女子学生と一流教授陣の「格差」を心配するほどであった。文部省に提出する専任および非常勤の先生は就任承諾書を添付して、2年前に提出しなければならないのであるが、認可された大学でないので、「公募」するわけにはいかず、教員のリクルートは骨の折れる仕事であったと思われる。たとえば、特色ある女子大学ということで、「女性心理学」「女性社会学」などの講義を用意したが、新しい講座名はフレッシュさはあるが、それを担当できる専門の先生を確保することは予想外の困難であった。新しい大学設立のために、専任はもちろんのこと、非常勤の先生方にもずいぶん「無理難題」のお願いをしなければならなかった。他にもいろいろなエピソードがあるが別の機会にする。文部省に書類を提出してから専任および非常勤の突然の辞退により「差し替え」たりすることもあった。その中には認可直前に死去なさるという不幸な出来事もあった。このような書類の変更の提出は時間的な余裕がまったくなく、つねに緊張の連続であった。英和が大学づくりで恵まれていた点は、文部省に近いという地の利であった。電話するよりも、直接文部省の担当官の説明を受ける方が早かったのも結果的にはプラスになったようである。なお、大学を新・増設する場合は、職員（専任教員以外）が準備を担当するのが一般的なようだが、英和の場合は学長および学部長予定者それに専任教員予定者がその設置にかかわり、カリキュラムなどの教学面を担当した点は高く評価されたようである。

さて、設置の準備が進むにしたがって職員の数も増え、準備室も「昇格して」地下の短大の元食堂に移されて活気が沸いてきた。設置認可が文部省からおりるのは昭和63年12月中旬である。

認可が交付されてはじめて入学準備に取りかかることができるのである。この時期には理事長や学長そして関係者は緊張の連続であった。認可前に大学案内などの広告をすることを「フライング」と言ってきびしくとがめられる。しかも認可がおりる前提で入学試験の準備もしなければならない。開学後のための学則等の準備もしなくてはならない……仕事は「無限」にある。

12月22日、午後1時30分、文部省5階第二会議室で認可の交付がなされた。理事長、学長そして院長の微笑みが印象的であった。

認可が交付されると本格的に翌年4月の入学に向けての準備が開始された。準備室は総体制で昼夜を徹して最後の追い込みにかかった。「敬奉奉仕」の精神で貫かれた準備室スタッフ全員がこの大事業を一致団結してなし遂げたのである。夜が遅くなることも度々であった。日比谷線地下鉄の「広尾」の駅がいつしか「疲労」と聞こえる錯覚もあったように記憶している。

平成元年2月11日に最初の入学試験がおこなわれた。新設の大学で十分な広報活動ができなかったにもかかわらず、多くの受験生が集まり、そして四大の歴史を飾るにふさわしい優秀な学生、社会人学生が合格した。

平成元年3月25日、準備室が六本木の古巣から晴れの新天地・横浜校舎に移転した。3月29日大学校舎竣工式が挙行され、あわただしく時が経過した。この間に各方面から多大な支援および協力をいただいた。とくに、「母の会」あるいは卒業生の熱意がなかったならば、この大学設立という大事業が成就したであろうか。また、専任を予定されている先生方の「前倒し」での就任、特別な協力がなかったら果たして可能であったのだろうか。財政的に必ずしも豊かでなかったにもかかわらず、大学設立が実現したのはひとえに一致団結の「協力」の精神があったからであろう。

大学が開校されても完成次をむかえるまで多くのいばらの道を歩むことであろう。ただ無我夢中で「大学設立」というミッションを走り抜けてきたような感がある。大学設置は文部省の認可を受けるため、どうしても同じようなものばかりになってしまい、建学の精神など大学の特色を打ち出すことはあまりできない。大学の真の成果が問われるのはこれからである。

平成3年1月の日本女子大学国際交流セミナー「現代社会における女子大学の意義」でアメリカ

東部の名門女子大学ウェルズリー・カレッジの学長が大学の真の評価は「卒業生」で決まると話された言葉が脳裏に浮かんでくる。大学の新設・学部の増設などで18歳人口の暫定的な急増に「無造作」に増えつつけている大学を横目に見て、互いに真の女子大学のあり方を探し求める責務があるように思われる。

(注)

本稿は、土持先生のご了解を得て、最小限の補正をさせていただきました。……………編集部

## 「東洋英和女学院大学」設置にあたって

学長 朝倉孝吉

皆様ご案内のように、これからは女性の時代と言われます。日本の国でも漸く男女雇用機会均等法が施行されました。イギリスのサッチャー首相、ノルウェーのブルントラント首相をはじめ女性の活躍が目立ちます。東京の有力四年制大学の卒業式でも女子学生の総代が多くなってきました。25年前私がニューヨークの国連本部におりました頃、日本人女性のスタッフはガイドさん2名のみで、専門職の方は皆無でした。現在は部長クラスの日本人女性が3名、専門職には優秀な方が沢山おりますし、毎年東京で行われる国連職員の試験には女性の合格率の方が男性より高いという事実もあります。25年の歳月はこのように大きな変化をもたらします。いまから20年、30年後、皆様のお嬢様方が社会で中心的な活動をされる頃はどんなになっているのでしょうか。

これからの国内、国際、双方の政治経済、社会情勢の変化を考えますと、わが国の女性の職場進出も本格化し、キャリアウーマンも多くなるとみられます。そしてキャリアウーマンの資質を備えることが良妻賢母になる一つの条件になる日がく

るかも知れません。いずれにせよ世界は目まぐるしく変転していきます。私共は何をするにもこのような時代的背景を充分ふまえなければなりません。

私は大学づくりのご依頼をうけた時、いくつかのことを考えました。まず第一に東洋英和の建学の精神と教育の理想であるキリスト教的精神による人格の育成を基底において、そのうえに新しい時代のニーズに応え得る資質、例えば良妻賢母に加え国内、国際社会で活躍できる女性の育成を目指すべきと考えました。二つには、種々の制約条件をクリアする実現可能な内容をもった大学をつくることを考えました。まず、私共は大学をつくることをきびしく制限している準制限地域につくるのでありますから、文学部のようなどこにもあるものは認可になりません。余程特色ある内容の大学でなければならぬ。そのうえ、東洋英和にふさわしい内容、学部学科名称でなければならぬ。短大の学科との関連も考慮しなければならぬ。学院の財政もふまえなければならぬ。しかも、大学設置審議会をパスする為には大学設



(大学設置・学校法人審議会による  
 実地審査 S 63. 9. 26)

置基準を充分クリアーするものでなければならない。このようないくつもの制約条件を充分ふまえたうえで、人文学部、人間科学科、社会科学科というところに落ち着いたのであります。

現存する四年制女子大学の中で政治、経済、国際関係、地域文化のような社会科学の学問を中心とする学科をもつものはこの大学が日本ではじめてでありますので充分特色あるものとなります。この学科は、既存の大学の法学部政治学科、経済学部経済学科、国際関係学部、比較文化学部などのエキスを充分とり入れた学際的総合学科のようなものであります。

人間科学科は従来、人間関係学科というのがポピュラーで、これは心理、社会、教育の専攻コースを置かなければならないので、私共はもっとグローバルに人間を考えられるように専攻の枠を外し、学際的に研究し四年次で宗教をふまえた人間学でしめくくるといふものであります。この学科は他大学の文学部の心理、社会、哲学、教育、宗教の各学科のエキスをとり入れた総合学科と考えればよいと存じます。

両学科ともに学際的な学科としたのは、今日、社会が進歩し複雑化し既存の学部学科では対応しきれなくなっていることをふまえたものであります。

つぎにカリキュラムについて一言申し上げます。

両学科に共通の一般教育にキリスト教的精神による人間形成をめざした科目を配置し、語学は「話す」「聞く」を重視した少人数制のフレッシュマン・ソフモア英語による徹底した語学教育を行い、さらに、専門教育科目にも英語による講義が準備されています。また、一年次でフレッシュマン・セミナーをおきますが、これは新入生に大学にはいった実感を与えると共に大学教育に幅広く接するという観点から全専任教育がそれぞれの専門分野から大学教育に関して講義をし、学問上のオリエンテーションを行い単位を与えるもので、これもわが国では初めての試みと存じます。むろんコンピューター関係の教育と実習も致しますが、特に強調したいのは、極く、少人数制のゼミナール(演習)を必修とすることで個性尊重の人格教育ができるのであります。いまこういうことのできる私立大学は本当に少なくなりました。大学四年間で真に自分で勉強し学問できるのはゼミナールであります。そこでは教員との人格的ふれ合いや学生同士の切磋琢磨が行われる訳であります。一流のマンモス大学では、ゼミに入れない学生がかなりあり、ゼミに入れた学生に比して、学力、学生生活、そして就職に至るまで、その差は極めて大きいのであります。その他、現在最も不足している留学生などの為の日本語教員の資格や社会教育主事の資格もとれるよう配慮されています。社会科学科の卒業生は本人が希望すれば、男性と同じ条件の総合職につくチャンスもあります。私はいろいろの角度から考えましたが、学院の教育の理想を充分身につけたうえで、広く社会的活動ができる人間、同時に次代を背負う子供を立派に育て得る人間を育成する為に——これは神の御旨にかなう人間の育成になる訳ですが、そういう人間の育成の為にこのような学部、学科が一番望ましいと信じています。

皆様方のご理解とご協力を賜るよう伏してお願

い申し上げる次第であります。お子様がたのすこやかな成長を心からお祈り申し上げます。

ご清聴有難うございました。

(昭和63年5月28日記)

(注)

本稿は、学長先生のご了解を得て、「大学設置準備室だより」(創刊号、1988.7.15発行)から転載させていただきました。……編集部

## 新しい飛躍

学部長 小林政吉

本学院の皆様からの心からの御支援をいただき、新しい四年制の東洋英和女学院大学が実際に実現される可能性がますます強くなってきております。この設置の趣旨や概要については、学長予定者朝倉孝吉先生の説明や大学設置準備室からの各種のおしらせがその都度行われておりますので、ここでは、新設大学の教育哲学を担当する一教員として予定されている者としての私が今いただいている大学への期待を申し述べることをお許しいただきたいと存じます。

現代の大学のあり方は、一面において、現代社会そのものもっている特質から大きく規定されております。それは、まず、急速に進歩発達する諸学問の研究成果をその理論と技能において若い世代の人々に教え、これらを学び得た者が、これらを人生を渡る道具としてそれぞれの社会的地位を求めてゆくという社会的機能を、現代の大学が果しているということです。次に、現代社会は、高度に発達した市民社会になればなるほど、その社会における学校教育の場が、学業成績や卒業資格をめぐるはげしい自由競争の場になってくるということです。つまり、現代の大学は、次第に、「客観的真理」それ自体の追求のための純粋な学問の場というよりは、それを応用しての万人の万人に対する競争の場になってゆく傾向が強くなってくるということです。このような競争の原理は、個人と個人との間だけでなく、国と国との間にま

で及んでいって、多くの苛酷な争いが展開されてきているのです。そして、何よりも恐ろしいことはこれらの「客観的真理」の認識内容が精緻になり、量的にも多くなってゆくの、人間は、これらを、人と人、国と国との間での真の信頼と平和における人間関係や国際関係において活用するよりも、むしろ、他者を制圧する武器として用いて争いあうことに熱心であるということです。

たしかに、私たちは、これからも「客観的真理」をより正確に見出し、ゆかねばならず、このためにこそ、多くの研究所や大学がつけられてきているのです。しかし、すべての出来事が全地球的な影響力をもつようになってきた現代の社会においては、今までの現代社会の主流であった「自由競争」の生活原理は、人間に課せられているもう一つの重要な生活原理である「他者への奉仕」の精神によって補われ、制限されねばならない事態になってきていると思います。このような状況にあって、私たちは、今まで学んできた西洋精神のいくつかの源泉の中でも、特に「奉仕」の生活原理を最も深いところから確立してきたキリスト教精神という源泉から、各人が自らの課題を再確認するということが大切になってきていると思います。すなわち、今まで神を恐れることを忘れ、神への不信と裏切りと人間性への過信のうちに破滅と悲惨の道をすすみ、折角認識することのできた事物に内在する客観的真理を悪用して、互いに傷

つけあってきた私たちは、十字架と復活の主イエス・キリストによって神へのたちかえりをよびかけられ、大きく許されつつみこまれることによって、正気にもどされ、再び神を仰いで隣人への奉仕の生活にあゆみ出ることができるようにされることを聖書は教えているのです。このような神を仰いでの奉仕の生活においてこそ、事物に内在する客観的真理を人と人との間柄において活用することができるようになるのだと思います。

このように見てまいりますと、現代におけるキリスト教主義学校の使命はまことに重要なものであると思います。くりかえしていえば、私たちは、大学においては、何ものにもとらわれない冷静な客観的真理の探究と教育にはげまなければならないと思います。しかし、これらの認識内容が人と人との間において道具として用いられる「生活現実の場」が問題となってきたときには、これらが相手の人々への奉仕の生活原理によって活用されてゆくべきことを身をもって学び教えあってゆくことが大切であります。このときにこそ、あらためて、聖書のまなびとキリスト教精神の理解が課題となってくるのです。

## 「 大 学 設 置 準 備 室 」

大学設置準備室は、昭和61年7月に室長を小谷局長の兼任、本部の林・吉原両課長の兼務のほか、進藤紘子さんが専任スタッフとして任命され、また、教員の立場から清水武先生が顧問、土持先生が嘱託として就任（同年10月短大専任教員・準備室員となる）されて開室されました。さらに10月には学長予定者の朝倉孝吉先生を顧問にお迎えして正式に発足しました。

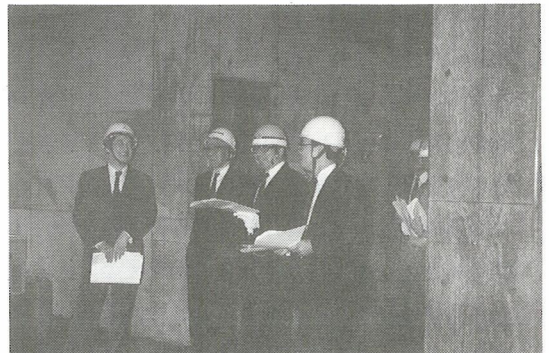
その後、準備室全員の懸命な努力により「大学設置申請書」は去る62年12月末、文部省より

「敬神奉仕」を最も大切な指標として発展してきた本学院は、四年制大学の創設によって新しい飛躍をしようとしています。この際、新しいものの追求と同時に、古くて変らない人間の課題の再確認とその実現への努力にも心がけるべきでしょう。そうすれば、新しい飛躍は真に充実したものとなることでしょう。

あえて私見をのべれば、新しい大学が、ただ外側だけの創設にとどまらず、さらに内側での一応の充実をみるためには、最も短かくて、一世代三十年は必要だと思われます。これをたとえてみますと、多様な特質をもった水滴や泉や小川が次第に集まりあって一つの大きな河を形成するようなものといえるでしょう。すぐれた教職員と学生が全国から集まって、あたかも現代社会という大海にそそぐ美しい河となることを私は心から希望しています。

（注）

本稿は、小林先生のご了解を得て、「楓風」（第5号、1988年11月6日発行）から転載させていただきます。…………… 編集部



（大学設置・学校法人審議会による  
実地審査 S 63. 9. 26）

## 「大学設置準備委員会・大学設置準備室の発足」

標記委員会は、下記のメンバーで昭和61年7月1日に発足しました。

理事長	西野 嘉一郎	院長	田島 信之
短大学長代理	前田 寿	事務局長	小谷 洋一
企画室長	吉田 昭	(顧問)	清水 武

大学設置準備の実務に携わるため7月1日に準備室が設置され、下記の室員が嘱任されました。

室長	小谷 洋一(法人事務局長 兼任 7月1日付)
室員	林 喜久夫(法人事務局 庶務管財課事務主任 兼任 7月1日付)
室員	吉原 健二(法人事務局 会計課長 兼任 7月1日付)
室員	土持 法一(嘱託 7月15日付)
室員	進藤 紘子(短期大学 庶務係長 出向 7月15日付)

(以上、「本部報№69」昭和61年7月15日発行から転載)

## 「大学設置準備委員会・大学設置準備室の解散」

長期にわたり、ご尽力ありがとうございました。

### ○大学設置準備委員の解任

西野 嘉一郎	田島 信之	
朝倉 孝吉	秀村 欣二	小林 政吉
小谷 洋一	吉田 昭	土持 法一

### ○顧問の解任

東洋英和女学院顧問 朝倉 孝吉  
大学設置準備室並びに準備委員会顧問 清水 武

### ○大学設置準備室の解散

小林政吉準備室長以下専任の準備室員は、大学職員に就任する。

兼務者の解任

林 喜久夫(法人事務局庶務管財課長)  
吉原 健二(同会計課長)

(以上、「本部報№83」平成元年3月10日発行から転載)

【編集後記】 途中から編集を引き継ぐ形となり、しかも初めての仕事なので暗中模索でした。

ご協力をいただきました、学長、学部長、土持の各先生、中高部の朽木先生ならびに事務部門の方々に感謝いたします。(赤羽)